

DVD評

DVD「アレクサンドリア」評

～4世紀の女性天文学者を襲った悲劇～

大島 修（岡山県立水島工業高校）

本国スペインでは2009年最高興業収入を記録した映画で、日本では2011年3月に公開されたが、全国的に上映館が少なく、見る機会がなかった。9月にDVDが発売されたので購入して見た。

4世紀のアレクサンドリア。舞台は、70万巻の蔵書を誇った図書館とその周辺。主人公は、図書館長の娘にして女性天文学者のヒュパティア（アストラーベとハイドロスコープ＝液体比重計の発明者だそうだ）。キリスト教が民衆の多数派を占め、世俗権力と結びついていく時代。

それまでのアレクサンドリアは、エジプトの神々を信仰する人、ユダヤ教徒、キリスト教徒、真理を追究する科学者（哲学者）など、いろんな立場の人たちが共存し、ピタゴラス以来のギリシア文明の伝統が最後の輝きを放っていた。

若くしてヒュパティアは、学問に一生を捧げる決心をし、奴隷も含めさまざまな立場の人に数学や天文学を教え、尊敬を得ている。その中には、ローマ帝国のエジプト総督やキリスト教司教など、後のエリート指導者となる青年たちもいて、皆が美しく聡明な彼女に傾倒していた。

やがて圧倒的な数の民衆の信仰を得たキリスト教が世俗の権力まで左右するようになる。後の13世紀には教会博士として聖人の列に加えられたキュリロスは、キリスト教徒たちを扇動し、異端の信仰を守っているとしてアレクサンドリア図書館を襲撃させ、貴重な蔵書を焼き、図書館を破壊し、ユダヤ教徒を追放し放浪に駆り立てる。

そんな中でも、自分の頭で考え続けることの大切さを説き続けるヒュパティアが、なおもアレクサンドリアの指導者に影響を与え続ける姿は、キュリロスの目には最大の敵として写っていた。

<以下、ネタバレが嫌な人は読むべからず>

映画は、自分に危機が迫る情勢下でも、ヒュパティアは思索を続け、太陽中心説を補強する慣性の法則を、動く船のマストから砂袋を落とす実験で証明し（ガリレオの著書の話を取り込んだのだろう）、考え抜いた末についに惑星は太陽を一つの焦点とする楕円軌道を描くという発見に到るまで（もちろんケプラーの仕事をモデルにした脚色だろうと思うが、正確には史家の解説を期待）の場面を描く。そして悲劇が訪れる。

映画の最後は美しく描かれているが、有名な史実は、はるかに惨い（ウィキペディアでも読める）。

スペイン人監督のアメナーバルは、イスラム原理主義が悪役を演じる21世紀の現代に、自分の依って立つキリスト教の暗い歴史を、真理を探究する科学者ヒュパティアの生き方と対比して、壮大なスケールで描いた。ガリレオが、そしてカール・セイガンが、死ぬまで何と闘い続けたかを思い出される作品である。

グーグルアースを操作するように、太陽の周りを回る地球を見下ろす衛星軌道上から、一気に、地球中心説を信じる民衆の姿をズームアップで映し出す場面もある。できるだけ大きな画面で見た。



「アレクサンドリア」2009年、スペイン。レイチェル・ワイズ（出演）、アレハンドロ・アメナーバル（監督）